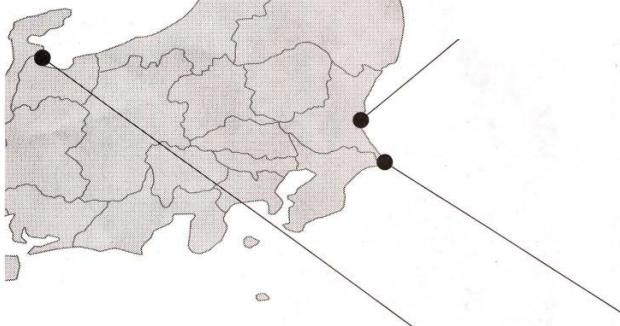


日本の水産を担う

青森・八戸の福島全良さん(37)
株福島漁業専務
福島全良さん(37)

世界が水産物に注目し需要も急増する中、日本の水産、漁業はどうか。漁業者は魚価安で苦しみ、資源問題に高齢化と後継者不足。課題のみが浮かび上がる。しかし、そんな暗闇の中で小さくとも明るく光り輝いている人たちがいる。これまでの慣習にとらわれないその光は、どんどん明るさを増し、周りを照らし始めてきた。これから漁業を担う人たちがここにいる。



若さで突き抜ける力がある。自社の経営をみるだけではなく、地域の再生も頭から離れない。

青森・八戸の福島全良(まさよし)さん(37)は、大学卒業後、大洋漁業に入社した。入社後は冷食・直販などを担当。7年間勤めたあと、10年に父が社長を務める福島漁業に帰ってきた。大洋漁業で加工畑での仕事は居心地もよかつたが、「30歳になる前には帰つてこい、脂の乗つた時期がない」と言われ、気持ちが動いた。

歴史ある漁業会社の3代目となった。「漁業に従事したわけでもないから、漁業の知識はないから、漁業の知識はゼロに等しい」。しかし、それまで別の環境で働いてきた視野の広さと、新しいことを受け止められる柔軟さを武器にしてきた。

漁業界で積極的に発言するようになったの

べき漁船像として指定

が、地元八戸の漁業再建に力を貸す。今年は、サバが豊漁で収益は黒字。好循環が続いている。『でも、漁船がいくらよくな

るわけではない。漁場をどう使うか、労働力をどう確保するか、魚価をどう上げるか: 金体がどう利益を挙げるので、問題は山積している』。そういう問題意識が、地元八戸の漁業再建にも目を向けさせる。「八戸は水産で生きていいくしかない。水揚げする市場から加工工場、消費に至るまで、変化し続けている時代に合わせて、官民の力を合わせて、臨機応変な対応をしなければ、地域は埋没していく」。だから、八戸市が進めている漁港改革プロジェクトには大いに賛成。その熱意はじわじわと地元にも広がりつつある。「一貫の国際競争力がある漁業をつくりたい。そのため『若造』だけれども、どんどん発言していきた

漁業地域の若者から発信する漁業改革 「若造だが発信していく」

